

シロイチモジヨトウ

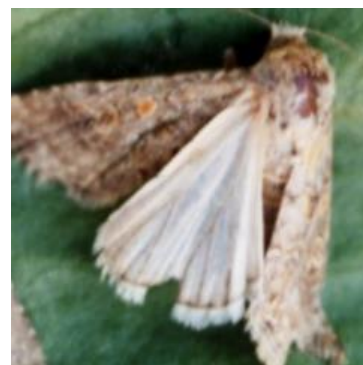
チョウ目ヤガ科に属し、日本全国と世界の熱帯～温帯地域に広く分布し、国内で確認された幼虫の寄生植物は26科64種に及ぶ広食性の害虫です。マメ科、アブラナ科、ウリ科、ナス科、キク科、ユリ科、アオイ科、シソ科、セリ科、アカザ科、ヤマノイモ科、イチゴ、スイートコーン等の野菜類やカーネーション、ガーベラ、キク、グラジオラス、スターチス、トルコギキョウ、宿根カスミソウ、ケイトウ等の花き類を加害します。本虫の英名 Beet armyworm のとおり海外ではテンサイ、ワタの長距離移動性の重要害虫として知られていましたが、国内では以前は発生が少なく重要な害虫ではありませんでした。ところが、昭和58年頃から鹿児島県、高知県のネギ産地を中心に発生してから分布や被害が急速に拡大し、本県では昭和62年に富樫氏により発生が認められました。

1. 形態

(1) 成虫

体長約12mm、翅開張は30mm前後、前翅が灰褐色で黄褐色の円形小斑紋が2対あり、後翅は白く半透明です。昼間は葉裏や雑草に潜み、夜間に活動します。雌は葉裏に数十～数百粒からなる卵塊を数回に分けて1頭当たり約1000粒産みます。卵塊は黄白色～灰白色の鱗毛で被われています。

特に、作物の低部位（地上10cm以下）や、若い生育ステージのものに好んで産卵する習性があります。



(2) 幼虫、蛹

体色は若齢期で淡緑色ですが、中齢以降になると淡緑色、緑褐色、暗褐色と同じ種類とは思えないほどに変異が現れ、終齢で体長は30mm前後まで成長します。胴部の側面に白線があり、気門の周辺にピンク色の斑紋があります。県内の露地では7月下旬～9月に発生が多くなります。

発育零点は15.3℃、気温25℃における幼虫期間は17日程で、夏季高温時に多発します。

5齢を経て土中で蛹になり、25℃では9日程で羽化します。



2. 被害

(1) 概要

葉、花蕾、花卉、果実を食害します。孵化後の幼虫は集団で葉裏を食害しますが、生長に伴って分散し、食害量も増えるので被害が拡大します。加害部位は品目によって異なりますが、狭い隙間に潜り込んだり、葉を綴り合せて内部から食害する習性があります。このため薬剤がかかりにくい上、薬剤抵抗性も発達しているため防除の難しい害虫です（表1）。

表1 シロイチモジヨトウ2齢幼虫の薬剤感受性（和歌山農試の試験データから抜粋）

系 統	薬 剤 名	LC ₅₀ (ppm)：半数致死濃度			
		平成2年	平成6年	平成10年	平成14年
合成ピレスロイド	トレボン乳剤	71	508	3200<	—
カーバメート	ラービンフロアブル	—	326	2560<	—
I G R	カスケード乳剤	0.1	<0.6	80<	<25
マクロライド	アフーム乳剤	—	—	—	<0.6
ピロール	コテツフロアブル	—	—	3	<3
オキサジアジン	トルネードフロアブル	—	—	—	<12
フロホニルオキシフェニル	プレオフロアブル	—	—	—	19

注) 幼虫採集地：和歌山県日高郡印南町のサヤエンドウほ場、検定：葉片浸漬法（キャベツ）

3. 発生状況

病害虫防除室では、かほく市にフェロモントラップを設置し、発生消長を調査しています。本虫は休眠性がないので、県内の露地では越冬できないと推測され、暖地より遠距離飛来したものが、高温期に繁殖していると考えられます。平年の誘殺虫数は7月中旬頃より増加しますが、今年は6月下旬より急増し、8月4半旬までの誘殺虫数は平年の約8倍と非常に多くなっていますので、被害の多発に注意が必要です。（図1）

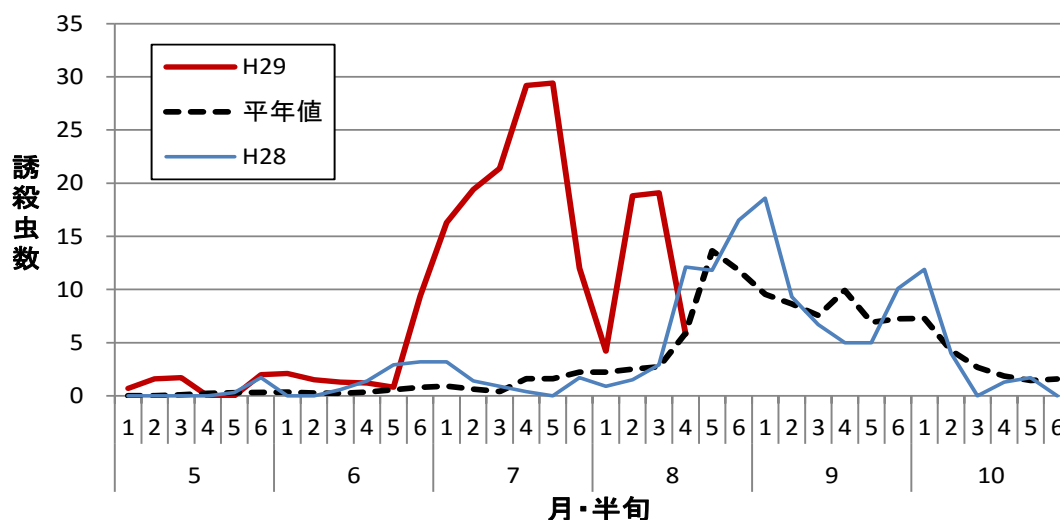


図1 期間中の誘殺消長（かほく市内日角 フェロモントラップ）

4. 防除対策

- (1) ほ場を見回り、卵塊や若齢幼虫が付着している葉や被害残渣は直ちにほ場の外で処分します。
- (2) 雑草にも寄生するので、ほ場周辺の除草を励行します。
- (3) ハウスの開口部に防虫ネット（目合：4mm）を張り、成虫の侵入を予防します。
- (4) 事前に複合交信かく乱剤を設置すると、成虫の交尾や産卵抑制により、被害が軽減されます。導入する場合は、ほ場の条件や面積等の検討が必要となります。
- (5) 薬剤散布（同一系統の連用に留意、7日間隔を基本）

シロイチモジヨトウは薬剤抵抗性が発達し、成長と共に薬剤による防除効果が低下するので、アフーム乳剤、コテツフロアブル等、効果の高い薬剤を分散前の若齢期に葉裏に十分付着する様に散布する事が重要です（表1）。また、刺激を感じると体を丸めて落下するので、散布前にはほ場を歩かないようにします。